

平成29年度病害虫発生予察特殊報第4号

平成29年11月24日
栃木県農業環境指導センター

モンオビヒメヨトウのエゴマでの発生について

1 害虫名：モンオビヒメヨトウ *Dysmilichia gemella* (Leech, 1889)

2 発生作物名：エゴマ

3 発生経過

平成27年秋期、県東部地域のエゴマほ場において、花穂中のがく及び子実の殻に円形の穴が開き、内部が食害される被害が多数認められた（写真1、2）。被害は、近隣のエゴマ栽培地域で、高頻度に発生していた。

平成28年8月下旬の調査において、花穂の被害とともに花穂に寄生するチョウ目幼虫（写真3）が採集され、飼育によってエゴマの子実を食害し、同様の被害を生じることが確認された。

採集した幼虫を飼育し、羽化した成虫と蛹及び幼虫について、鳥取大学 農学部 生物資源環境学科 中 秀司准教授に、外部形態及び遺伝子配列による同定を依頼した結果、モンオビヒメヨトウ（ヤガ科ヒメヨトウ亜科）であることが確認された。本種による栽培エゴマの被害確認は国内初である。

4 被害の特徴

幼虫が、がく及び子実の外殻に穴を開け、頭部を突っ込んで子実内部を食害する（写真4）。花穂上の隣接した子実は連続的に食害される（写真5）。本虫の発生が特に多い場合には、大半の花穂及び子実が被害を受け、収穫がほぼ皆無となる。

5 形態及び生態

成虫は開張24～32mm。触角は雄では繊毛状、雌では糸状。顔面は円錐形に突出する。前翅地色はやや光沢のある赤錆色で、黄白色の斑紋が並ぶ。

終齢幼虫の体長は25mm程度。若～中齢幼虫の体色は緑色であるが、老齢幼虫は全体的に暗色化し、背面に赤紫色の斑紋が目立つ（写真6）（以上観察結果）。採集された幼虫を25℃恒温条件で飼育したところ、10月上旬には花穂から離脱して蛹化した（写真7）。その後は温度・日長条件の制御をせず、自然条件で室内飼育を行い、翌年9月上旬から羽化した（写真8）。

分布地域は北海道、本州、九州、対馬、屋久島。国外では朝鮮半島、中国（黒竜江省、河北省、浙江省、福建省）、ロシア南東部からヨーロッパ。年1化性で成虫は8～9月に出現する。平地、山地、草地に生息する。幼虫期の寄主植物はエゴマとされる。



写真1 ほ場における花穂の被害状況（赤枠内は加害により穴の空いたがく）



写真2 子実の被害（赤枠内は被害子実を拡大）



写真3 花穂の茎上に定位する幼虫 (円内)



写真4 子実を加害する中齢幼虫



写真5 隣接した子実を連続的に加害する
老齢幼虫



写真6 老齢幼虫 (体長: 約 25 mm程度) と若
齢幼虫 (体長: 10 mm程度)



写真7 蛹 (体長: 12 mm程度)



写真8 成虫

6 防除対策

- (1) エゴマにおいて本種に適用のある農薬はない。
- (2) ほ場を観察し、寄生が認められた場合は捕殺する。

7 引用文献

岸田泰則編 (2011) 日本産蛾類標準図鑑Ⅱ (学研) 416pp.

詳細は、農業環境指導センター (Tel 028-626-3086) までお問合せ下さい。

病害虫情報発表のお知らせはツイッター「栃木県農政部 (@tochigi_nousei)」、農業環境指導センターホームページ (<http://www.jpnpn.ne.jp/tochigi/index.html>) でもご覧になれます。